



～年間聖句～「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」コリントの信徒への手紙Ⅱ 5章17節

話すことは、聴くこと



「話し合いが大切だ」と、誰もが言います。

人と人の間では当然大切ですが、でも、「話し合い」というのは言葉のやり取りだけでないのです。顔の表情、声の調子、しぐさ、間などから相手の気持ち、心の変化を察知します。これは、対人関係をつくる基礎基本になるのです。相手の話を聴く力、話を引き出す力、この人に話したいという気持ちにさせる力につながります。つまり、「話し合い」の力は、スキルになるので、意識して身に付ける努力をしなければ、スキルは向上できません。これは「知識」だけでなく、「経験」がとても大切になります。経験なら当然失敗することもあるでしょう。でも、そこで掴んだものはなさないようにすることが大切になっていきます。

「話し合いが大切だ」と、誰もが言います。

弁舌さわやかで相手を引き込む力だけでは通用しません。「以心伝心」も通用しません。これはすべて一方通行なのです。双方向コミュニケーションで、情報の交換や心の動き、変化などあらゆる面で良好な平衡が保たれていることが望ましいのです。そしてその平衡が更に、他のファクターによって、新しい創造の方向に移動することが大切なのです。

「話し合いが大切だ」と、誰もが言います。

「話し合い」の力は、本人がその気になって取り組まなければ身に付きません。それは一人一人の自覚と謙虚さと愛が必要です。押し付けではいけない、威張ってはいけないなど頭では理解しているが、一段高い位置から見下ろす立場についなりがちになります。話を聞いてやるとか、理解してやるといふ姿勢では、「話し合い」の力は付かないのです。

「話すことは聴くこと」という言葉があります。

話す前によく聴き、聴き続ける、聴き通す寛容さが大切になります。

「話し合いは知的作業」なのです。

「話し合い」は人と人との心の交流です。相手の成長を妨げる「毒語」のような言葉は、自分のプライドが高く、相手を見下ろしていると出やすいのです。そして一度口にした言葉は取り戻せません。言葉は心へ刺さる凶器にもなることがあります。

「傾聴」という言葉は、みなさん知っていると思います。

「傾聴」するということは、「話すことで放す」という「心理的安全性」と、「話すことで離す」という「客観性」と二つの効果を獲得させることができます。私は大人の研修などで話すとき、こんな体験をしてもらいます。一人の人に、実際にたくさんの荷物を持ってもらい、その人に問います。

「今どんな気持ち？」 「重たい」「早く置きたい」「助けて～」

「今いくつ荷物を持っている？」 「よくわからない」「そんな余裕はないよ～」

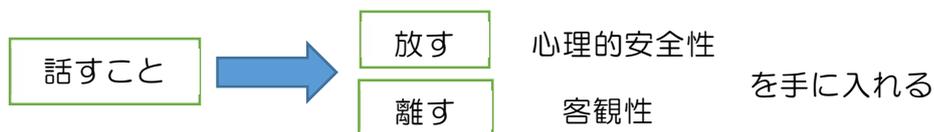
その荷物を受け取ることが「傾聴」であると。

荷物を一つ受け取り、二つ受け取り、下に置いていく。相手はどんどん軽くなっていく。心も身体も。

「今どんな気持ち？」と再び問うと、「すっきりした」「楽になった」と言います。

「今いくつ荷物を持っている？」と再び問うと、手ばなした荷物を見て明確に個数を答えられます。

「話す」ことで『「放す」と「離す」』が実現すると、相手の心の荷物が軽くなり、気づくスペースが生まれ、やっとアドバイスや励ましが入っていくのです。



《ちょっといい話》

9月に、ある方から、本校の音楽科に対して、譜面台、メトロノーム、チューナー等の贈り物をいただきました。その方は、昔、女学院行きの西鉄バスの運転手さんをしておられ、バスに乗る本校の生徒、職員のおいさつとマナーにとっても癒されていたことをおぼえて、これからも女学院生を応援していますというお気持ちで贈られたそうです。今は遠い関東の方におられるのですが、時々、当時のことを思い出されてうれしくなるそうです。このようなお話は、私たち女学院に関わる者にとって、とても元気をいただけると同時に、その方に対してのレスポクトをおぼえます。音楽科の生徒もお礼のお手紙を出したそうです。本当にありがとうございました。

2学期は、どんな“たし算”ができましたか？ これからも「成長はたし算」

(学校長 重枝 一郎)